

東京バッハ合唱団 月報

[第 673 号] 2018 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 673

July 2018

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第116回定期演奏会 “敵を赦し、天では神の子 すべての友に”

(2018 年 5 月 12 日、武蔵野市民文化会館)

ご来場者からのメッセージ、ご感想など

バッハを歌う日々がつづいています

先月号「月報」では、目白聖公会創立百周年記念イースター・コンサート (2018/4/8、日) にお招きいただき、客演したことをお伝えしましたが、実はその前日 (4/7、土) にも荻窪教会で、同じプログラム (BWV 4 全曲、BWV 31 と 42 抜粋、いずれも復活節カンタータ) のコンサートを開いています。定期演奏会の 1 か月前に、定演の曲目とは異なる内容でコンサートを開かせて頂いたわけで、団員にとっては、かなり多忙なシーズンがつづいています。

この月報がみなさまの手許に届くころには、既報のとおり、毎年恒例となりました当合唱団の創立記念日感謝コンサートが催されていることでしょう (6/30、土、荻窪教会。懇親会・バザー併催。第 116 回定演の曲目からの抜粋、器楽アンサンブルの友情協演)。この間に、夏の野尻湖プログラム (8/2~8/5) の詳細も決まり、息つく暇もありません。

つい数日前には、野尻湖近傍の小布施町での客演も要請されました (8/2、小布施ミュージアム)。野尻湖神山教会コンサート (8/4) と同内容の曲目 (BWV 1 抜粋、BWV 4 全曲) です。ですから負担にはなりません、多忙はつづきます。多方面からお声がかかり、バッハを歌うことの大好きなわれわれ団員一同にとっては夢のような話であり、光栄のかぎりです (2018/06/24)。

“敵を赦し、天では神の子 すべての友に”

第 116 回定期演奏会が、右掲のとおりで開催され、今回もまた、ご来場の方々からアンケートなどをおとして、多くのご感想、メッセージ、ご意見等をいただきました。スペースの都合ですべては掲載できませんが、いくつかをご紹介します。

■会場アンケートより <演奏全般について>

・世界の調和と平和への祈りの心を、選曲された 4 曲の訳詞をとおして、ひしひしと感じました。人間界の遥かに上位置する大いなる力を感じ、信じて任せることの尊さと底深い真実に目が覚める思いです。内容も演奏も大変良かったです。

・カンタータの深さを知りました。よかったです。

・最後にみんなで歌うのが大変良いです。



■第 116 回定期演奏会リハーサル風景、中央はテノール独唱黄木透氏 (2018/5/12、武蔵野市民文化会館小ホール。撮影・千葉光雄：団員)

<終了報告>

第 116 回定期演奏会

“敵を赦し、天では神の子 すべての友に”

- ・カンタータ第 178 番《主 われらに いまさずば》
- ・カンタータ第 176 番《抗い また怯むは ころの常》
- ・カンタータ第 177 番《呼びまつる 主イエスよ》
- ・カンタータ第 1 番《あしたに輝く 妙なる星よ》

ソプラノ＝光野孝子、アルト＝佐々木まり子

テノール＝黄木 透、バス＝小藤洋平

オルガン＝草間美也子

オーケストラ＝東京カンタータ室内管弦楽団

合唱＝東京バッハ合唱団

指揮＝大村恵美子

2018 年 5 月 12 日 (土) 14:00 開演

武蔵野市民文化会館 小ホール

・リヒター・ミュンヘンバッハの 1 番を聴いて家を出ました。比べるつもりはありませんが、“音楽は見るもの”と“ライブにかぎる”と再認識いたしました。

・今回、カンタータをコンサートで聴く機会に恵まれ、なかなか良い曲だと思いました。バッハに外れなし、を再確認した心持です。合唱は人数以上に迫力がありました。もう少し増えると良いですね。

■会場アンケートより <とくに、日本語演奏について>

・バッハを日本語で演奏できるとは思わなかった。テ



■本番を前に、コーラスに発声指導をされる佐々木まり子先生（撮影・千葉光雄：団員）

ノールのアリア「世の愉しみ 怖れも」はすばらしかった。レチタティーヴォ [BWV1/2] もすばらしかった。

・文語体なのでやや難解ではあるけれど、口語体では表わしづらい格調と深みがある。すばらしい訳詞です。

・日本語で一緒にうたってみて、その良さも感じました。

・わかりやすく、こころに染みこむ。

・やはり日本人が歌うには、そのほうが感情も入りやすい

と思いますし、聴く側も（訳詞を見ながらとなりますが）より感情移入できるような気がしました。初めての体験でしたが、やはり言葉の影響というものがあるんだな、ということが分かりました。一方で訳詞を見ながらでないと、日本語で歌われていることに気づかないくらい、曲に溶け込んでおり、違和感を感じませんでした。訳の仕方も素晴らしいのだと思います。

佐々木 まり子（団友、声楽家）

5月13日夕方に盛岡に戻り、この数日間の日々を幸せな想いで改めてかみしめております。

この度は、本当にコンサートでお世話になりまして、誠にありがとうございました。アルトが歌わせていただいた曲 BWV 176/5 〈恐るな 沈める心よ 立ち直りて聞けよ イェス語るを〉や、BWV 178/2 〈かたえに 主いまし わなより 解き放ちたもう〉、難曲中の難曲 BWV 177/2 の〈われ お願いまつる 主 応えたまわん〉など、今現在の私を常に励まし、日常生活の中でこそ光り輝くみ言葉が、バッハの美しいメロディーに乗って、より胸に迫りました。大村先生はじめバッハ合唱団の温かいお心づくしの数々に心より感謝します。

皆様との絆はこれからもずっと、つながっていますので、又お目にかかれます日を楽しみにしております!!

[佐々木まり子さんは、1980年代の初期より、当団のアルト独唱者の中心として長年ご協演くださり、日本語のバッハ歌唱法の確立にも多大な貢献をお果たしになりましたが、このたびのステージを最後に、後進に道をお譲りになります。心からの感謝をもって、今後の指導者としてのご活躍をお祈りいたします]

安藤 能成（団友、世田谷中央教会牧師）

かつて世田谷中央教会で練習していらっしやった団員の方々のお顔を久しぶりに懐かしく拝見しながらバッハの教会カンタータを聴かせていただきました。

一つひとつの楽曲がそれぞれにすばらしい内容でした。そして最後に演奏されたカンタータ第1番は、出だしの合唱伴奏にホルンやイングリッシュホルンでしょうか、その響きにパストラールのような雰囲気があって優しい雰囲気が漂っていました。もう思いはクリスマスでした。とても心地よく聴かせていただきました。

そして最後に聴衆も共に最終コーラルを歌わせていただいたとき、バスパートを楽しく歌うことができました。よかったです。恵美子先生によりしくお伝えください。

【演奏会以前にいただいたメールより】

[BWV 178《主 われらに いまさずば》の基本コーラルの元とされた] 詩篇 124 篇は、戦時中私の父(*)が治安維持法違反の嫌疑で投獄されていたときに獄舎で耳にささやかれたみことばでした。その6節以下、とくに7節「鳥のように私たちの魂は、仕掛けられた罠から助け出された」ということばを神様からの約束と信じて耐え、10か月後に帰宅することができたと聞かされました。

父たちが経験してきたことは、最近の日本の社会状況を考えると、この先起こりえないとは言い切れないようにも思います。6月26日が検挙された日ですので、毎年、直近の礼拝でそのことを語るようにしています。

*) [安藤能成牧師のお父上は、後年、日本同盟基督教団の総会議長をつとめられた安藤仲市牧師。第2次大戦中の1942年、日本のキリスト教史上、プロテスタント教会に対する最大の迫害とされるホーリネス弾圧事件に際して投獄された]

三谷 啓文（団友、戦争を許さない市民の会）

日常の喧騒を脱して、ホッとするような心地よいバッハの時間に浸ることができました。武蔵野市民文化会館の会場は、そびえたつパイプオルガンをバックにした合唱と、客席の聴衆に一体感が生まれ、とても素敵でしたね。

第178番、〈世の力と知恵 われら恐れじ〉から〈荒き大波激しく〉へは、敵を迎え撃つ緊迫感のなかにも日常生活から生まれる人間的な愛らしさを感じます。《ロ短調ミサ曲》のハイテンションとは違い、リラックスした歌声でした。

第176番《あらがい また怯むは こころの常》では、のびやかな合唱のうねりが天に昇るような力強い躍動的なバッハの音を体験できました。

第1番の大団円は、みなさんが楽しんで歌ってらっしゃる喜びが伝わってきます。今の社会状況に立ち向かう力の誕生の喜びに溢れているようで、感動しました。《ロ短調ミサ曲》の後に、優しく力強いひとときを与えてくださった大村先生と合唱団の方々に心より感謝申し上げます。

☆

第117回・第118回定期演奏会についてのお知らせ

大村 恵美子（主宰者）

昨今は演奏会場を確保することがたいへん困難になり、1～2年前に抽選を受けて、やっと第2、第3候補にでも決まれば好運、という事態も珍しくなくなってきました。

今年の年末は、久しぶりの《クリスマス・オラトリオ》を計画していて、前回と同じ会場（当月報で報告の第116回定期演奏会、武蔵野市民文化会館小ホール）が、早くに抽選に当たり、喜んでいたのですが、《クリスマス・オラトリオ》を12月に聴きたいという聴衆の要望はかねてからとても多く、収容数が杉並公会堂の約3分の1という小さな同ホールでは、たとえ座席指定にしても、不都合が生じるのではないかと懸念する声があがっていました。

その一方、合唱団創立50周年記念として、4大作品を2011年～2014年にわたって5つの定期演奏会で実現させた結果、多大の赤字を招いてしまいました。大作品に外部から集まる合唱参加者がそのまま定着せず、終ると大幅に離散してしまうのは恒例のことで、おそれていた通りに団員数も減り、団の運営にも大きく響くことになったのが現状です。わが国全体が高齢化の影響で、歌う人も、聴く人も、支援する人も、家族介護の苦勞なども加わって、年々減少傾向が加速されています。

◆第117回定期演奏会（本年12月）は、内容を変更します

そんな具合で、4月の団員相談会の結果、合唱団の赤字対策が、喫緊の急務であることが明らかとなりました。一日も早くどこかで立て直すべきで、それには、ステージの狭さなどにも問題を抱えていた、上述の第117定演を、この際思い切って、オーケストラの規模を極端に少なくして（可能なかぎりヴォランティア協演者をお願いし）、会場も、もともと上演の希望が伝えられていた荻窪教会に移してみようということに決めました（12/22、土曜、14時開演）。

内容は、以前に1度演奏したことのある（第84定演、1998年）、年末用のカンタータBWV 28《頌むべきかな 年終り》は当初計画のまま全曲を、そして《クリスマス・オラトリオ》前半3部（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）は、いくつかのストーリーが混在する内容を、野宿する羊飼いらに天使の福音が告げられる、というシーンに絞って、Ⅰ部：全曲カット、Ⅱ部：第10曲シンフォニアに始まり、第11～23曲の全曲、それにⅢ部の最後の第34、35曲、次いで同部冒頭合唱の第24曲〈あまつ君よ 聞きたまえ〉で華々しく閉じる、という試みにします。

過去にも、このような狙いで、世田谷区民会館（1981

年）や御茶の水学生キリスト教会館（1985年）の子供向け演奏会として実行したことがありました。それにしても、創立以来56年の間に、弱小合唱団が《クリスマス・オラトリオ》を40回近くも実現してこられたことは、奇跡にも近いほどの幸運ではないでしょうか。どうぞ今後とも多くの支援者の皆様のご理解とお励ましを、お願いいたします。

◆第118回定期演奏会

ステージ主題：“悩みのさなかにも 堅き望みを”

日時：2019年5月18日（土）

会場：府中の森芸術劇場ウィーンホール

（演奏時間：計82分、楽譜はいずれも今回新規発行）

第117回定期演奏会は、上記のような事情で、変更が施されますが、2019年5月予定の第118回定期演奏会は、さいわいにも、多くの聴衆の方々から好評を得ている、府中の森芸術劇場ウィーンホールに決まり、使用楽器もホルン、フルート、オーボエの室内楽的な構成なので、運営的にも大した支出に悩まされることはなさそうなので、小規模活動をしばらく余儀なくされる私たちにふさわしい企画と信じます。

その音楽の内容については、現況に励ましと慰めとを切実に与えてくれる、すばらしいカンタータ4曲が揃って、私は自分の選曲ながら、この出会いに惚れ惚れとしてしまった程でした。地球上を見わたしても、毎日の変りようが激しく、国どうしの離合集散も目まぐるしく、どうなってしまうのだろう、という個人々の〈心の揺れ〉が甚しいうえに、自然の気象や地殻変動も集中的に加わります。

このような、地球の激しい時期に生きる人間の叫びは、まさに「信仰なきわれを助けたまえ」（マルコ9：24）の一語に尽きるでしょう。ここでは、とりあげたカンタータ4曲の歌詞からピックアップして、“悩むさなかにも 堅き望みを”と名づけた心の動きを、音楽に向き合う前の皆様に、あらかじめ、それぞれ想像していただこうと思います。最近、一つ一つのカンタータを知悉され、さらにそのコンサートに赴かれる直前に、何枚ものCDなどで演奏を比較なさり、終演後のアンケートには「いろいろ聴いたが、なま演奏を聴く快感と喜びに如くはないことが、今回も確かめられた」と、有難い感想を伝えてゆかれる方もあり、私どもは大喜びです。皆様も、ご自分の期待を、これらの歌詞の断片から、湧き上がらせていただければならぬと、試みに書き記してみることにしましょう。

①カンタータ第109番《われは信ず わが主よ》

Ich glaube, lieber Herr, hilf meinem Unglauben BWV 109

初演1723年10月、三位一体節後第21日曜日、ニ短調、25分。当団では未演。

1)合唱：〈われは信ず わが主よ / 助けたまえ 信仰なきわれを〉。

この句（マルコ 9：24）は、私が聖書を読み始めたばかりの時に、インパクトをもって心に焼きついたものでした。合唱の中で、SATB 各パートが単旋律で歌い出し、全パートがそれに短く和してゆく。——信仰ないものでも神を信じられるのだ。

2)レチタティーヴォ(テノール)：〈主の手は 引き上げられず…… / わが身 地に沈む / あわや われ 倒されんか…… / 主は なれ 癒さん、病めるなれを / げに 慰めは 来たるや 主よ そはいつ〉

3)アリア(テノール)：〈揺れ動く 望みよ…… / かぼそき葦は 折れ / あらたなる 痛み / 恐れより招かる〉

4)レチタティーヴォ(アルト)：〈心よ 恐れ鎮めよ / …… 信仰の目 主の救いを見るべし / 遠くに 見ゆれども / 約せし主を信じ おこなえ〉

5)アリア(アルト)：〈主 知りたもう 望み抱けぬ み民を〉

6)コラール：〈主をのぞみ 頼れば 辱め受けじ / 岩の上に建つれば 倒ることなし…… / 主に慰められ み民を 主は助く〉

②カンタータ第 166 番《いずこへ 主よ 行きたもう》

Wo gehest du hin BWV 166

初演 1724 年 5 月、復活節後第 4 日曜日、変ロ長調、17 分。未演。

1)アリア(バス)：〈いずこへ 主よ 行きたもう〉

主を失くした弟子たちは身の置きどころに迷い、再びゆき会えたイエスに、この問いを向けて食いさがる。

2)アリア(テノール)：〈み国を思いて 世には わが心 任せず / 去るも とどまるも この問い われを離れず / おお 人よ 赴くや いずこへ〉

3)コラール：〈主に ねがい求む / われを導き 逸らしめたもうな なが思いより〉

4)レチタティーヴォ(バス)：〈雨水も流れさり…… / しばしは おのれの幸に 酔えど / その間にも 終りの鐘鳴り / 別れ来たらん〉

5)アリア(アルト)：〈心せよ 幸 微笑まん…… / タベ訪れ 朝には いまだ見ざりし様に / 変わり果てなん〉

6)コラール：〈わが終り 近づくや / 知るはただ 主のみ…… / よき終り 賜え〉

③カンタータ第 188 番《わが堅き望み》

Ich habe meine Zuversicht BWV 188

初演 1728 年 10 月または 29 年 11 月、三位一体節後第 21 日曜日、ニ短調、24 分。未演。

1)シンフォニア

2)アリア(テノール)：〈わが 堅き望み、まことなる神にあり…… / みな 砕け落つとも / まこと 信仰 失すとも / 主こそ いと善き神〉

3)レチタティーヴォ(バス)：…… 〈黒雲 日の光を さえぎるごとく / 優しき雨の後 / み恵み さらに豊かに増さん / ときに厳しくみゆる主は / 慰め 増さんため〉

4)アリア(アルト)：〈十字架と苦しみも いとよき賜物〉

5)レチタティーヴォ(ソプラノ)：〈世の力 失せゆく…… 神 仰ぐ者 生かさせん〉

6)コラール：…… 〈主は 救いをたもう / 悩むさなかにも わざわい除かん / 恵みの 手もて〉

④カンタータ第 79 番《神は わが光 盾》

Gott der Herr ist Sonn und Schild BWV 79

初演 1725 年 10 月、宗教改革記念日、ト長調、16 分。当団では 1962 年第 1 回公演、1972 年再演。

1)合唱：〈神は わが光 盾…… / み恵みは 欠くることなし〉

2)アリア(アルト)：…… 〈主は その群れを 顧みたもう〉

3)コラール合唱：…… 〈ひと 幼くありし 日より / 今ものちも 主 いますなり〉

4)レチタティーヴォ(バス)：…… 〈いまなお めしいて苦しめる はらからあり / かれらをも 主よ 顧りみ / 主こそ まことの 道と / 悟らしめたまえ〉

5)二重唱アリア(ソプラノ/バス)：…… 〈見捨てたまわざれ なが み民を〉

6)コラール：〈われらに まことを / とわの自由を 与えたまえや〉

4 つのカンタータの最後、BWV 79/6 コラールの言葉に、この演奏会の祈りは集約されます。

1945 年に敗戦した日本は、戦勝した国に天皇制の存続を命じられ、じつはその戦勝国そのものが日本の天皇制にとって代わったという、お目出たい民衆われら。真の自由に立ち帰って、どんなグローバリズムの濁流にも消え去らず、真実の人生に生きつづける。そしてまだ、めしいて苦しみ続ける友に、手をさしのべる。この神の恵みの受け入れ、同朋に対する愛の力への祈りが、私たちの生を中心であるように——バッハの音楽を通して強く訴えるのです。

1575 年という早い時代のヨーロッパのコラールの中にすでに、ewigliche Freiheit（とわの自由）という語が出てきたので、あまりの新鮮さに、私はおどろいてしまいました。

◆第 119 回定期演奏会への希望

第 119 定演は、BWV 110《喜び 笑い 溢れ》と《クリスマス・オラトリオ》後半 3 部を計画していますが、先述のとおり、前半が、会場を荻窪教会に変更して、第 II 部を中心とした縮約上演となりますので、来年末も同様の縮約版で後半をこなすか、あるいは、団員が増え、財務も立て直して、何とか大きな会場で、前半の I・II・III 部全曲を、あらためて鳴り響かせるか、と思案のしどころです。

いずれにしろ、スポンサーとなる企業や公的助成の手を期待するなど、みんなで見出したいものです。